臨海実験所創立100周年について

（日本の海洋生物学100年記念事業委員会委員長）
水　野　丈　夫

三崎に臨海実験所が創立されてから今年で丁度100年になりました。実験所周辺は地形の変化に富む上，相模湾の深所も間近かにひかえ，黒潮の生物もやってきて，きわめて豊かな生物相に恵まれています。理学部に動物学教室が誕生したのは明治10年ですが，モース，ホイットマン両教授のあとをついだ箕作佳吉教授は，明治18年に三崎の北条湾に面する入船の幕府船番所跡に土地(70坪)を入手し，そこに木造２階建（実験室１，採集品仕分室１，標本室１，図書室１，寝室２）の実験所を建設しました。落成は明治19年12月13日。翌明治20年（1887年）４月１日に「帝国大学臨海実験所」と正式に命名されました。この臨海実験所がつくられたのは，世界的にみてもかなり早い時期であります。当時，ダーウィンやヘッケルなどの進化論者により刺激を受けた19世紀後半の生物学者たちは，広く動物の各部門にわたって比較解剖学の必要性を痛感するとともに，比較発生学もまた進化・系統を明らかにする上で重要であるため，陸上よりも豊かな生物相をみせる世界各地の海辺に続々と臨海実験所を建設していました。わが三崎臨海実験所の創設は世界におけるこのような気運のまっただ中に行われ，イタリアのナポリ臨海実験所，フランスのヴィルフランシュ臨海実験所などに続くものの，英国のプリマス実験所や，米国のウッズホール海岸生物学研究所の創立(1888年）に先立つものでありました。しかし，当時の日本は，日米和親条約を契機として外国との国交を開いてからわずかに30年をこえたにすぎず，また，箕作教授も28才の若さであったことは驚くべきことであります。

やがて，三崎の町は発展し，北条湾の海も汚れてきたし，来訪者を収容しきれなくなったので，入船の北方，油壷湾に面する小網代の現在地に移転しました。この場所は北条早雲によって亡ぼされた三浦一族の居城のあとで，亡霊がでるといって人々が寄り付かない閑静な場所がありましたし，海岸線が変化に富んだ点でも入船の実験所よりはるかに優れていました。時に明治30年（1897年）でした。それからというものは，魚類学者ディーン，ジョルダン，棘皮動物研究所モルテンセンなど，欧米の研究者がしばしば実験所を訪問するようになり，早くより国際化されて，近代的な動物学の基礎を築くための前線基地として重要な役割を演ずるようになりました。

三崎臨海実験所のその後の歴史は「東京大学百年史」（1987年発行）や「東京大学理学部附属臨海実験所の百年」（編集責任者：磯野直秀，1987年発行）を参照下さい。現在の本館は昭和11年（1936年）４月に竣工しましたが，すでに半世紀以上を経過し，ちょっとした雨でも必ず室内は水びたしになり，レンガは頭上より落ちるばかり，台風が来れば一部屋ごと吹きとぶといった，廃屋寸前のありさまになっています。臨海実験所が果すべき正当の役割を考えると，このままでよい筈がなく，100年の節目に全面改築され，機能化されることが強く望まれています。

なにはともあれ，日本最初の海洋生物学の研究教育施設として創立された三崎臨海実験所は，本年４月１日に100才となったわけで，これを記念するため，日本の海洋生物学100年記念事業委員会（委員長：水野丈夫臨海実験所長）がつくられ，同委員会は去る４月２日，山上会館において記念式典と国際シンポジウムを挙行しました。

式典には魚類分類学の専門家でもあられる皇太子殿下，ならびに皇太子妃殿下のご出席のもと，森　亘総長挨拶，水野丈夫委員長式辞に続き，皇太子殿下，塩川正十郎文部大臣，J.D.イバート米国ウッズホール海洋生物学研究所元理事長，刘瑞玉中国科学院海洋研究所長，江上信雄日本動物学会長，渡辺　浩国立大学臨海・臨湖実験所長会議議長の祝辞があり，唐沢俊二郎郵政大臣より「海洋生物学100年記念」の記念郵便切手が委員長あて伝達されました。また，世界各地の臨海実験所より祝電が寄せられ，披露されました。また，式典終了後は，同じく山上会館一階ホールで祝賀パーティが開催されました。

国際シンポジウム（王子セミナー）「海洋生物学の進歩と展望—細胞・発生生物学への貢献—」は4月2～4日の3日間にわたり，山上会館において行われました。総参加者数193名。うち，国内168名，国外25名で，国外参加者は中華人民共和国，米国，カナダ，フランス，ベルギー，スウェーデンから招へいされました。セミナーでは，世界各地で第2世紀に突入した海洋生物学の使命と正当性，その未来に対する批判と重要性が論ぜられたほか，かつて三崎臨海実験所で世界にさきがけてなされた数々の発見がひきがねとなって生れた新しい研究成果が幾つも発表され，注目を集めました。数多くの優れた発表にフロアからも活発な質問が出され，最後まで熱心な討論が続けられました。セミナーが終了したのちも，各所でグループまたは個別な論議がなされ，特に若い研究者，大学院学生諸君にとって刺激的かつ有意義な国際セミナーになりました。本セミナーの詳細については「生物科学ニュース」5月号を参照下さい。

4月5日は，セミナー招待者と特に三崎臨海実験所に縁の深い方々を実験所に招いて，臨海実験所100年の誕生を祝いました。集うもの，海外参加者をふくめて100余名でした。折りから晴天に恵まれ，満開の桜花のもと，祝宴が行われました。参加者はいまなお見せる三崎の磯の景観に感動し，100年の間，使いふるされた実験所の歴史をかえりみ，またあるものはセミナーの続きの議論をするなどしたのち解散しました。外国人有志は翌4月6日に古都鎌倉を訪れたのち帰京しました。

なお，本記念事業は有馬朗人前理学部長，戸張喜之前理学部事務長を含む記念事業委員をはじめ，理学部事務部のすべての方々，動物学教室の方々のご支援とご協力により行われたものであり，みのり豊かに終了することができました。ここに記して厚く感謝する次第です。

王子セミナー（山口会館）4月3日

臨海実験所における祝宴（三崎、4月5日）